

---

# プレタポルテ

みか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プレタポルテ

### 【Nコード】

N8927S

### 【作者名】

みか

### 【あらすじ】

家庭教師ヒットマン リポーンの二次創作です

その手のものに対し嫌悪などを感じる方は読むのをお勧めしません  
自己責任でお願いします。

転生

特殊能力もち

綱吉の姉設定

原作知識ややあり  
綱吉を守るために頑張る。

## ため息の温度

「サキ！これ読んだっけ？」

「あー、リボーン？」

それはまだ読んでないけど…もういい。」

「ちよっもっいいってなによー！面白いじゃん！」

「そうだけどさー。話ややこしくなっけちやっだし、私には無理

…」

「えー…てか、サキどうしたの？顔色悪いよ？」

「そう？なんか熱っぽいんだよねー」

その日の夜、私は救急車で病院に運ばれた。

耐えられないほどの頭痛、嘔吐、寒気に発熱。

血液検査やらなんやらの結果は

癌だった。

末期。

私は、あと少ししか生きられないといわれた。

私はあまり積極的に延命治療を求めなかった。

家族や医師にはあまりにも無気力すぎる、と言われたが

私にはどうしようもできなかった。

インスリンが必要で

体がうまく動かなくて

文字の羅列を見るのがつらい

そんな体に

これ以上何を求めるといえるだろう

人は皆死ぬのに

数週間病院で治療を受けた後は  
海辺のきれいな保養地に送られた。

キリスト教系の病院で、毎日ミサがあった。

歌を歌ったり、見よう見まねでお祈りをしたり。

私はそれなりに楽しい日々を送ることができた。

病院の近くには小さい入江があつて

私はそこが大好きだった。

その日も、若いシスターに連れて行ってもらった。

さつきまで降っていた雨はやんでいて

雨上がりの独特なおいが私を包んだ。

草むらを抜け、入江に出た。

ただ、そこにあるだけで

なんの価値もない。

けれど

美しい、もの。

私は目を閉じ

深くため息をついた。

そして

眠った。

## 手のひらの温度

眠っていると、急に苦しくなってきた。

胸が押しつぶされるような感覚。苦しさがなくなったとき、私は久々に泣いた。

なんだか心がもろくなったようにも思えた。あんなにいつもは泣かなかったのに、

どうして今になってこんなに泣けるのだろう。

ちよっと泣いただけで疲れてしまった。やっぱり泣くって体力使う。

私がもう一度この世に生を受けて、もう三年がたった。

ご飯も普通に食べれるし、歩くことだってできるようになった。

そう、わたしは赤ちゃんとして生まれ変わった。

沢田万里子として。

今生きている世界がリボーンの世界だなんて受け入れがたかったが、結果受け入れた。

どうしようもないし、新しい生活もなかなか気に入っていた。

お父さんはIT系の仕事で海外に行っているとかであり家にいない。私が生まれてすぐにはそばにいてくれたがそれ以降は三か月に一回がいいところ。

だからまだに数回しかお父さんにはあったことがない。

IT系の仕事と saying いたが、マフィアの仕事だろう。

お父さんが帰ってくると思わずと saying いいほど家から見える丘の上に黒いワゴンが止まる。

手をふったり、散歩と称して会いに行ったりもした。

ワゴンの中にはやっぱりお父さんの仲間のマフィアの人が普段着でいて、遊んでもらったりもした。

私は当然だが赤ん坊というのがどういった行動をするのかわからなかった。

変に行動して怪しまれるのも困るので、私は寝ることにした。

ひたすら寝る。起きたらお母さんのすきを見て本を読んだり新聞を読んだりする。

おかげですくすくと成長した。

それでも私の他とは違う様子は隠しきれず、お母さんは次第に面白半分に読ませていた本などを私の周りから遠ざけていった。

もつとほかの遊びをしてほしかったらしい。

でも私は他の子と遊ぶにはどうしたらいいのかわからなかったし、脳が柔らかくなった今

知識の吸収はとても楽しいものだった。

つい最近私に弟ができた。名前は綱吉。

リポーンの主人公だ。

今日はお母さんが退院する日。それと同時に綱吉がこの家に来る最初の日。

お父さんも一か月はまとまった休みを取ってお母さんのそばにいるようにしている。

朝、いつものようにお父さんに起こされた。

退院は昼過ぎだから、まだ時間はある。

お父さんはリビングでパソコンを使って仕事を始めたので、私はそばで新聞を読んでいた。

読み終わるとお父さんの膝の上へ乗り、パソコンを覗き込んだ。

そこにはなんちゃらファミリー本部への侵入プロセスとあり、いかにして侵入するかが分かりやすく書いてあった。

お父さん…私に分からないと思って…なんて仕事をしてるんだ。

「万里子。もうすぐ誕生日だけど、何かほしいものとかあるか？」  
何でも買ってあげるぞ〜とお父さんは急に話をふってきた。  
パソコンに集中していた私はびっくりして、おもわず

「本。」  
と言ってしまった。

三歳の子供が本をおねだりするなんて聞いたことがない。

しばし沈黙。

「ごめんなさい、おとうさん。

まり、おほんとかすきなんだけど、だめ？」

上から覗き込んでいたお父さんに声をかける。ああ、いけない。警  
戒させてしまったんではないだろうか。

「謝る必要はないよ、万里子。

いいぞー本かー。万里子は頭がいいんだなー！」  
泣きそうになった。

お父さんはやっぱり、私のことを訝しんでいる。

私のお父さん。

すべてあなたに話してしまいたい。

## 決意の温度

ふう、と息をつく。

家に弟が来た。もう寝てしまった。私も布団の中で寝たふりをして  
いる。

お父さんとお母さんは隣の部屋で話してる。久々にゆっくりできて、  
お母さんもううれしいみたい。

おとうさんが、今日のことを言わなければいいけど。

私は布団にもぐりこんだまま考えた。

今後、どうしたらいいかについて。

あかちゃんって、不思議だ…体すごいやわらかい。  
そしてよく眠る。

お母さんは「まりちゃんるときもたくさんおねんねしてたのよ」  
と言っていた。

あかちゃんってそういうもんなのね…

興味津々に綱吉の世話をしていると、年相応のしぐさに見えたのか  
お母さんとお父さんはほっとしたようだった。

私はそれを横目で見ながら、ああ。早くどうにかしないと。と思っ  
た。

でもどうすればいい？

ピンポン。

珍しくインターフォンがなった。お父さんが家にいるときは来客なんてめつたに來ないのに。

「誰かしら？ まりちゃん、ちょっとつなくんのこと見といてくれる？」

「わかった。」

部屋には私と綱吉、お父さんが残された。

綱吉は体を前後に揺らして動き回っている。わたしはゆりかごのそばで見守る。

「万里子。」

さきに沈黙を破ったのはお父さん。

「なに？」 私は綱吉から目を離さずに答える。

「おまえは、何者だ。万里子ではないだろう。何が目的だ……」  
そうきたか！

思わず脱力してしまった。いや、可能性として考えなかったこともないが、本当にそうくるとは。

「……？ まりはまりだよ。」

どうして、そんなことというの？

「もう演技はいい。」

早く答える。お前はどこのファミリーのものだ？ 言えないほど小さいファミリーなのか？

何か、固いものが頭に添えられた。ごつり、と頭をなでる。

「こんな小さな体、殺すのは一瞬だぞ……？」

綱吉がお人形と戯れている。お父さんが誕生日に買ってあげた、ウサギのお人形。

お母さんが玄関先で話しているのはお父さんの部下なんだろう。楽しそうな声が聞こえる。

「どうした、早く答える。」  
「あ！」

それはほとんど同時間だった。

ウサギのお人形の眼が取れて、綱吉が啞えてしまった。

私は口の中に手を入れてボタンを取ろうとした。

お父さんはそれに殺気づき、サイレンサー付の銃を発砲した。

私の足に。

## 決意の温度（2）

、え…？

私は最初、何が起こったのかわからなかった。次第にジンジンと熱を持つ足。おそろおそろ見ると。

肉好きの良い足が、真っ赤に染まっていた。

やっと最近立ち上がって歩けるようになったのに。その足が、あか く…

「万里子…？」

お父さんが恐る恐るといったように話しかけてくる。

「や ああああああ！」

私は思いつきり叫んでお父さんから離れようとした。でも足がうまく動かない。

私ははいつくばってお父さんから離れる。血がリビングの床に付く。いたい。

引きずったら、さらに痛くなった。

私は何が何だかわからない言葉を言いまくった。

「万里子…、本当に、万里子なのか…？」  
いたい。

今更、お父さんのことなんでどうでもいい。

もうこんな人に認めてもらわなくなっただっていい。  
だから早く

「おかあさん…！」

「！」

助けて。お母さん。

綱吉。

私の大きな声にびっくりしたのか、綱吉もぐずってしまった。

ああ、泣かないで…

そばに行つて慰めてあげたいのにそばに行けない。

血だまりがどんどん広がつて、フローリングの溝に血が伝い、赤いあみだくじのようだった。

まるで、私の人生みたい。

目がかすんできた。

お父さんは呆然と立ちすくんでいるだけ。

かわいそうな人だ、と思つた。

かわいい娘にスパイが入り込んでいるかもしれないような世界に生きているなんて。

なんて、悲しい世界に生きているんだろう…

「まったく、何をしているんだ。家光？」

「九代目！？どうしてここに！」

誰かがリビングの窓から入ってきた。灰色のスーツに、杖…

九代目つてことは、ボンゴレ九代目だろうか？

「その子に憑依している者はいない。」

君は少し落ち着く時間が必要なようだな。」

九代目はゆっくりと私のほうへ近づいてきた。

「万里子かね？」

私はうなずく。

「うむ。君をイタリアへ連れて行くことと思つのだが、どう思つ…」

この状況で聞くなよ…と思いつつも答えた。

「賛成です。ただ…お母さんに…」

「心配はいらない。落ち着いてから連絡しても遅くはないだろう。」

九代目が私をそっと抱き上げた。

なんだかいい匂いだ。

「それでは家光。」

お前の娘はこちらで預かる。奈々さんへの説明は自分でどうにかしなさい。」

「は…」

九代目は来た時のように窓から出ていく。

かすんでいく視界の中で、最後に見たのは呆然と立ちすくむお父さんと私の流した血だった。

## 腕の中の温度

九代目は私をそつと車のシートにおろした。

その間も数人の白衣を着た人が私の治療をしている。リムジンって、結構広いんだ…

あつという間に治療が終わり、（なんか呪文使ったのかな？）白衣の人たちは九代目と私に会釈をしてぞろぞろと車を降りていく。

車が並盛病院につけられていることを見ると、この人たちは並盛病院の人たちみたいだ。

「落ち着いたかね？」

私の涙の跡を湿ったタオルで拭いながら九代目が聞いてきた。

「はい、ありがとうございます。」

あの…九代目、とおっしゃるんですか？」

「ああ、自己紹介がまだだったね。」

私はボンゴレ・ノーノ。君が察したとおり、ボンゴレファミリーの九代目だよ。

君のお父さん、家光の上司みたいなものだ。」

車がそつと動き出す。どこへ行くんだろうか。

でも私はその時そんなことどうでもよかった。ただはやくこの町から、並盛から出たかった。

「私は沢田万里子です。沢田家光の長女です…。」

「うむ。知っているよ…。」

沈黙が落ちた。やっぱり、この人にも赤ちゃんっぽい話し方をしたほうがよかったのだろうか。

私はまだ二歳と半年程度しか成長していないのに、こんな風にしゃ

べつたら

また拒絶されるだろうか。

私がうつむいていると九代目はそっと私を抱きすくめた。

「つらかったね…その小さな体に、多くのものを抱えなくてはならないなんて…」

香る、たばこのにおい。

付いてしまった私の血。

そんなふうには、慰めるように抱かれたのは初めてだった。

夜泣きをしない私は最初は喜ばれたがだんだん心配された。

かんしゃくを起こさない私は逆に不安にさせた。

何度も精神科医や、小児科医に行った。

私の行動は、病気かもしれないとらえられた。

私は、私なのに。

「で、でも…おかあさん、わるくな…いっ!

わたしがっ、もっ…と“らしく”すればよかった…から」

私が悪いの。こんな風に生まれてしまった私が。

流れる涙はすぐに九代目のスーツにしみこんで行ってしまった。

私はまるでなにかを探るように手を伸ばす。

「どうすればいいのかわかんなかったのっ…

ぜんぶしってる…のに、どうやってわらったり

ないたらいいか、わかんなかったのお…」

「うん、そうだね…つらかったね…。

今から、連れて行ってあげるよ。」

「ひっく…、ど」…?」

「とってもいいところ、だよ…。」

車は飛行場へと入って行った。

## 腕の中の温度（後書き）

ノ一ノは十年前ということとでちょっと口調若めに…  
別に口調分からなかったとかではなくですね…

## 椅子の温度

いわゆる自家用ジェットというやつか。

ぐん、とかかる重力を感じながら一人ごちた。

私とティモの周りには黒スーツの人がたくさん。

女の人もいる。ふつーの人にしか見えない人もいる。

九代目は私が九代目と呼ぶよりティモツテオと呼んでくれたほうが嬉しいというのでティモ、と呼ぶことにした。

なんだかもうこちら辺から日本では感じられない外国臭が…

「マリ。」

「なに？ティモ。」

私がティモと呼ぶのに合わせて私はマリと呼ばれることになった。

「マリはイタリア語かフランス語、英語はできるかい？」

ノーノにはリポーン！のことは伏せて、前世の記憶がある、程度に説明した。

「うーん…英語はできるかな。あとフランス語もちよっと。」

私は高校まで通ったが、なかなかの新学校でしかも英語コースというところだったので

それなりに英語ができる。それから選択でフランス語もやっていた。勉強しててよかった…

「オーケイ。まあ何とかなるだろう。何と言ったって、君はまだ一歳なのだから。」

「困ったら赤ちゃんのふりをするわ。」

「チャイルドシートに座りながら言われても、ね…しかし、困ることなんてそうないだろうよ。」

何か必要なことがあるなら私が、アジアに言うといい。できる限

りのことはする。」

「何から何までありがとう。ティモ。本当に感謝してるわ。」

「だからね、ティモ？」

「うん？なんだい、マリ。」

「私、ちゃんとするつもりよ？あなたたちが、ボンゴレが私に求める事、全部。」

すべてを差し出す代わりに、すべてちょうだい。

飛行機が着陸したのは小さな島だった。

イタリアの端にある島らしい。そこには大きなお屋敷があって、私はここで生活をするのだ。

素晴らしい屋敷の装飾に目が奪われる。青いタイルがすごくきれい。姫はこの屋敷を気に入ってくれましたかな？」

ひげの豊かなおじいさんが近づいてきた。スーツではなく、燕尾服を着ている。

ということ執事だろうか？

「アレッシオ。久しぶりだな、用意は？」

「お久しぶりです。ドン・ボンゴレ。滞りなく、すべて仰せの通りに。」

「よし。ではいこうか、マリ。」

私はティモに抱えられながらその屋敷に入って行った。

案内された屋敷はとてすばらしかった。

まるまる美術館にもできそうだ。

ティモは私にここで勉強、生活をするように言った。  
すきなだけしていいとも。

私が感謝と、お別れのキスをした後ティモは名残惜しそうにまたジェットに乗って飛び立っていった。

残されたのは私と執事さんと数人の使用人。

「そういえば、あなたのお名前は？アレッシオと呼んでも？」

「はい、マリコ様。どうぞアレッシオ、とお呼びください。」

「マリでいいわ。ねえ、お茶を入れてくれる？図書館に行きたいんだけど、あそこは飲食禁止かしら？」

「どこであってもお飲みいただけます。ここはあなたの屋敷なのですから。」

すぐに用意いたします。茶葉の指定はございますか？」

「そうね…カモミールを。」

「かしこまりました。」

図書館でお茶を飲んで、本に囲まれながら一息つくところ「ああ、日本を出たのだ。」

という思いがやっつとこみあげてきた。

お母さんから、お父さんから、そして綱吉から離れて、日本からはるかかなたのイタリアの孤島へ。

さみしいという思いより、安堵の気持ちごと押し寄せてきた。

ああ、日本を、沢田家を、出たんだ。

## ペンの温度

「おはようございます、マリコ様。朝でございますよ。」

やわらかい朝日が入ってきた。体を起こすとメイドが窓を開け、シャワーの用意をしている。

イタリアではお風呂ではなく朝シャンというものが主流らしく、私もすでに慣れてしまった。

「本日の紅茶はフォートナム・アンド・メイソンスのアッサムのストレートでございます。」

どうぞ、と差し出された紅茶。

差し出したのは執事のアレッシオだ。私は白いカップに入った紅茶のにおいを嗅ぎ、そっと戻した。

「いれなおして。」

「…さすが、マリコ様。ちなみに何が入っていたかお分かりになりましたか？」

「うん。トリカブト…アコニチンかな？匂いがするもの。」

アレッシオは懐からきれいな細工の施された小瓶を取出し、ウインクして見せた。

「正解です。では淹れなおしてきましょう。」

ありがとう。そういつてアレッシオを見送った。

なんだかコンヤD・N・エンジェ みたいな光景だが、これが日常だ。

初日にかかる（い（アレッシオ談）下剤を飲まされたのが始まりで今ではもう慣れてしまった。

まったく。こっちはまだ四歳だっというのに…

イタリアに来て二年がたった。言葉もずいぶんすらすらしやべれるようになって、勉強の量も増えた。

同年代の子を見てみると、うまく言葉が出てこないのは頭の中で整理してしゃべってないからだろうってことに気が付いた。考えるって大変だもんね。

アレッシオが淹れなおした紅茶を飲み、シャワーを浴び、身支度を整えながら今日の予定を聞く。

今日のけいこは乗馬、銃、フェイシング、昼食の後はイタリア本島であるカーレース観戦。

時間がないので乗馬の服を着たまま朝食。といっても軽めのご飯だ。あんまり食べすぎると気分が悪くなる。

「おはようハル。」

馬小屋に行つて愛馬のハルに挨拶をする。ハルは三歳の牡馬で、すっかりとしたからだを持つ馬だ。

私がこの島に来てあてがわれた馬で、この島に何頭かいる馬のリーダーでもあるらしい。

朝の世話を終えると馬術の練習が始まる。

朝の空気がおいしい、夏のことだった。

「こちらです。マリコ様。」

喧騒から一歩離れたVIPルーム。

ボックス席に通された私の後ろには影のようにアレッシオが付いている。

私は出されたジュースを飲みながら、今日のレースについて考えた。

フェラーリに代表されるように、イタリアではカーレースが盛んだ。そしてその裏にマフィアが絡んでいることは周知の事実である。八百長から始まり、レーサーの発掘まで。

それはボンゴレも例外ではない。

今回初めて参加するレーサーが一人いて、そのレーサーはボンゴレがまだ若手のころから目をかけていたものだった。そしてもう一人注目すべきなのが一番古株のレーサーで、このレーサーも長い間ボンゴレの恩恵を受け、好成績を残してきた。

それぞれに「あいつが負けてくれるらしいから、お前はボンゴレのためだけに走れ。」

と命令してある。

「さて、面白いレースが見れそうね……」

私も大分、ボンゴレに染まってきたようだった。

## ペンの温度（後書き）

コメントくださった方、本当にありがとうございます！  
がんばって更新していきたいと思えます^^コメントありがとうございます！  
ございました。

## アスファルトの温度

電子音のあと、プアン！と音を立ててレースが始まった。

シャンパンを片手に、私は静かに鑑賞する。まあ、カーレースなんて30秒もすれば終わってしまうのだが。

「あ、もう始まってんじゃないか。」

私達しかいなかったVIPルームに、変声まえのアルトが響いた。ガラス越しに目をやると、いかにも甘やかされて育ちました風の坊ちゃんが立っていた。その後ろには執事らしき人と、メイドが数人いや、メイドそんなにいらないだろ。

彼はドカツと行儀悪く私の隣の席に腰かけた。いまだに文句をぶつぶつ言っている。

アレッシオがそつと私のそばに立ち、その子を視界からフェードアウトさせてくれた。

さすが、アレッシオ。

「お？なんだ、俺だけじゃなかったんだ。レース見に来てたの。」  
あーあ。

甲高い電子音がレースの終了を告げた。

「…ポレンタファミリーのご子息、フェデリゴ様かと…」  
「ありがとう。」

小声でアレツシオが相手の名前を覚えてくれると、私の後ろに控えた。

私は確かボンゴレのほう格上だよ。とマフィアの力関係を思い出して「こんにちは。」

とだけあいさつした。椅子からは立ち上がり、あいさつした後は相手の出方を見る。

ポレンタの子息は私の態度に天狗の鼻を少し削られたようでむっとした顔をした。

まったく、なっていないな。ポーカーフェイスはどこやったのよ？

「やあ、こんなところで君みたいなかわいい子に会えるなんて思ってもみなかったよ。」

僕はフェデリゴ・ポレンタ。かわいい御嬢さん、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

ワオ…まだ幼いのに（推定七歳とか八歳）ずいぶん舌の周りが早いからね。

「初めまして、フェデリゴさん。あなたのような方にかわいいなんて言っていただけなんだから…とっても嬉しいです。」

私はニポオーテ・ボンゴレ・マリコです。どうぞよろしく。」

ニポオーテとは孫娘、ということだ。

フェデリゴに給仕していたメイドが皿の音を立てた。フェデリゴ自身はきよとんとしている。

「ニポオーテ？変わった名前なんです。とても…神秘的というか。」

孫娘、という単語を知らなかった模様。

彼に仕えている周りのほうがあわてている。あ、執事さんが教えてあげたみたいだ。

それでもフェデリゴには理解しづらいマフィアの世界だったようだ。私はただ彼の執事に微笑んだ。

あ、そういえば、レースは結局どっちが勝ったんだろう。  
まあいいか。

## アスファルトの温度（後書き）

メッセージがとびついでいます（>^）心にこみます...

## シャンパンの温度

別にボンゴレだからと言って特別扱いされたかったわけではないので、その後フェデリゴが私の立場の重要性を知っても、変わらず接してくれるのはうれしかった。

本当に理解していたかどうかはわからないが。

「マリコ！来てくれたんだね！」

クリスタルパレスのような温室。華やかかつ、落ち着きのある人たち。

今日はフェデリゴの招待されたポレンタ家の茶会に来ている。

ボンゴレより格下とはいえ、ポレンタ家は歴史も長く、細々だが各国の王家ともつながりのある家だ。

さらにフェデリゴの話の聞いている限り寄宿学校では中々な階級の人と交友しているようだし、紹介してもらえればいい。

軽い気持ちで向かった。

「ご招待ありがとうございます。フェデリゴ。とっても素敵な温室ね。」

「ありがとうございます。こつちへおいで。友達を紹介したいんだ。」

今日のドレスも素敵だね。などといったフェデリゴ恒例の褒め言葉をいただきながらテーブルへ向かう。

招待客はあまり多くはないようで、十数人がテーブルやソファにあつまり、各々会話を楽しんでいた。

「アル、紹介するよ。この子はマリコ・ボンゴレ。イタリアの友達なんだ。」

サツ、っと集まる注目。

ティモは私になにか規制をかけたか、したらいけないなどは言わないが、正式な場以外でこうして他人と顔を合わせるのはあまりないかもしれない。というか一年ぶりくらい？

アルとよばれた少年は聞いていた友達の話を中断させるところこちらを振り向いた。

絵に描いたようなイギリス人だった。金髪碧眼。透き通るような肌。つんとんがった鼻。

「ボンゴレ…？イタリアの友達って…手紙に書いていたのはこの子のことか？」

フェデリゴ、私のこと話したりしてたのかよ。まあ友達少なそうだしね…

「マリコ。こいつはアルフレッド・ウィンダー。歴史学の授業で一緒なんだ。」

「初めまして。Mr. ウィンダー。マリコです。」  
大きな碧眼を見開いたあと、あわてたように立ち上がり「初めまして、Ms. ボンゴレ…」

そのまま固まってしまった。ややほほを赤らめ、じっと見つめてくる。  
な、なんだろう…

「おい、アル！いくらマリコがかわいいからってあんまり見るなよ！マリコが減るだろ！」  
いや減らないが。

フェデリゴが声をかけるとアルフレッドははっとしたあとフェデリゴを引きずって草に隠れてしまった。なんだ？態度悪いな。

「気を悪くしないでやってよ。戸惑ってるんだよ。」  
するとさっきまでアルフレッドに話しかけていた男の子が声をかけた。  
きた。

「はあ…戸惑っている…」

「そ。君があんまりにもかわいいから。」  
ウィンク付き。

フェデリゴの通っている学校はこんな子ばっかなのだろうか…

「まあ帰ってくるまでここで暇つぶしでもどう？えーと…」

「あ、マリコと言います。はじめまして。」

「初めまして、マリコ。僕はポール・ヴェルヌ。よろしく。」

メイドがついでくれた紅茶を飲みながらお菓子をつまみつつ、ポールとそれとない話をしていた。

てか、ウィンダーってイギリスの王家の名前だしヴェルヌもフランスの貴族の名前にあったような…

ほんとフェデリゴ…なんて学校に通っているんだ…

## シャンパンの温度（後書き）

王家の名前はフィクションです^^  
そこまで勇気ありませんでした  
！笑

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8927s/>

---

プレタポルテ

2011年10月8日20時54分発行